

特 集

スウェーデン での生活

押 田 芳 治

昨年9月より本年6月まで、文部省在外研究員として、家族とともにスウェーデンの首都ストックホルム市に滞在しました。そこで、私たちが体験したり、見聞したりしたことについて、思いつくまま綴ってみました。

1. 妻の出産

何と言っても、私（たち）にとって最も大きな出来事だったと思います。スウェーデンでの出産及び出産までの検診システムは、日本とは随分異なっています。妊娠と思われたら、まず薬局で妊娠反応テスト液を購入します。陽性と出たら、地区指定の「母親センター」に電話予約し、受診します。そこで、担当助産婦が決まり、その後の定期検診はその助産婦により行われ、医師との関わりは最初と出産後だけです。ところで、スウェーデンは高福祉国家として知られておりますが、外国人がその恩恵を得るには一年以上の滞在許可を必要とします。すなわち、英語名で「Police Office」と呼ばれる役所で「Personal number」（日本で言えば、国民背番号）が交付されて初めて、スウェーデン人並の権利が得られる訳です。余談ですが、数年（5年？）以上の滞在者には、参政権も与えられるそうです。しかしながら、私（たち）の滞在許可は10カ月余しかなく、通常では「Personal number」を得ることができません。この「Personal number」なしでは、出産費用がどの位必要なのか、いろいろな人々に尋ねても検討も付かぬ額だそうで、しかも、指定病院での出産もできないかも知れないと言う人もいました。困惑し切った私（たち）に対して、出張先のカロリンスカ研究所の Jan Henriksson

助教授をはじめとして、多くの人々の助言や助力により、特例と思いますが、何とか「Personal number」を取得することができました。これで、安心してスウェーデン生活を送ることができました。今度は、いよいよ出産です。地域指定であるダンデリード病院まで、E3と呼ばれる高速道路を20分位走りました。出産の際、スウェーデンでは夫も立ち合うことになっており、私も立ち合いました。出産は主に病院当直の助産婦の介助で、無事3,000gの男子がまたまた生まれました（三男）。出産後の食事は、何と私の分まで用意されておりました。入院部屋には、各々大きなバスルームが付いており、食事室には常にコーヒーが用意されており、しかも冷蔵庫の中には低アルコールのビールや牛乳、軽食が入っており、食事以外でも自由に飲食できるようになっていました。病院も明るく、妻はホテル並の生活を送れたと思います。私以上に英語が下手な妻に、各病院スタッフは、笑顔を絶やさず指導してくれたそうです。さらに、ちょっとした事でも手を借してくれたり、これまで2回、名古屋で出産の経験のある妻にとって、スウェーデンでの出産、入院生活が一番良かったと言っております。私たちは、このような経緯から、スウェーデンの人々に感謝の気持ちを込めて、スウェーデン語の「Tack」（ありがとう）の意味で、三男の名前を「卓磨」（たくま）としました。

2. カロリンスカ研究所での実感

ご存じの方も多いと思いますが、医科系研究所として、規模や実績面で世界でも屈指の研究所と言われております。ここで、おもしろい事実がみられました。一部（教授になろうと思っている人々）を除き、多くのスウェーデン人研究者は、それ程ハードに仕事をしません。懸命に研究活動をしているのは、主に他の欧米諸国やアジアからの留学生です。私が主に研究を行った薬理学の Ungerstedt 教授の研究室も、米国、オーストラリア、フランス、アイルランド、スペイン、チリの人々が精力的に研究を行っていました。彼らは、

実験室や器具の確保のため、時には奪い合いの口げんかまでしていました。Ph. D を取得しようとする者、取得後有利な条件を得ようとする者など様々な思惑の交錯がみられました。日本で安穩として過してきた私にとって、強烈な印象でした。それに刺激された訳ではないと思いますが、私も一日平均10時間余の研究活動を行いました。スウェーデン人技術者から、「You work too hard」とも言われましたが、妻の出産も控えており、10カ月という短期間で何とか目鼻を付けようと必死だったと、そう思います。この出張が成功であったかどうかは、帰国後の活動にかかってくると思います。医師としての診療（保健管理室と附属病院）の他にも、数々の雑務で、下手をする心身とも疲れて一日が終わってしまうことすらあります。又、日本特有の「human relationship」も良いことも多いのですが、時に煩わしく思えることもあります。

さて、研究所の隣にカロリンスカ病院があります。この病院も地域指定の基幹病院で、各地区の小病院の紹介患者が主に受診しています。日本と違い、患者が自由に病院の選択ができません。一部の限られた人々のみが自己負担で個人病院(?)に受診しているようです。しかも、地区の小病院には、CT装置や超音波診断装置、X線透視装置、内視鏡などが十分に配備されておらず、基幹病院での検査のため1カ月以上待たねばならないそうです。その上、いざ入院といっても、全て順番通りの空きベット待ちで、長い人は3カ月も待ったと聞きました。したがって、早期ガンの患者でも、診断から入院治療までに数カ月も要する例があるそうです。日本の場合、医師や病院を自由に選択でき、必要な患者には早目の検査を予定外に組み入れたり、他に転院してもらったりして対処していますので、日本の方が医療事情は概ね良いと思われれます。

3. その他

私たち家族は、ストックホルム市のアパート地

区に住みました。環境は申すまでもなく抜群で、日本では余りみられない都市計画に沿って造られたところでした。アパートの住人は、老人の一人暮らしや老夫婦が大半を占めておりました。ほとんどの人が英語を話すことができ、ゆったりと身構え、老いてもエレガントさを失わないのには驚きました。私たちが何か困った際には、同じ階の人々が何かと手助けや助言を与えてくれたり、子供が生まれた時には、アパートの住人（1人のデンマーク人を除き、他はスウェーデン人）がこぞって祝福にかけつけてきたり、日本以上に日本的なものを感じました。一方、6才と4才の息子たちは、地区指定の普通の幼稚園に通いました。園児が20名足らずの幼稚園ですが、2名の先生がおられ、初めての外国人の入園にもかかわらず、普通に受け入れていただきました。次男は「Very nice boy」と評され、すぐに友人、特にガールフレンドもでき、毎日生々と生活しておりましたが、長男は言葉が障害になり、本人も先生も苦労したようです。しかし、半年も過ぎると、そんな長男も子供同志のスウェーデン語会話ができるようになり、大の親友もできました。それでも、今思うと、長男の気持ちの中には抑圧されたものがあったようです。

スウェーデンで生活して気付いたことに、町づくり一つとっても、弱者への心配りがあることです。当然、人々の態度にもそれを認めます。市中を歩いていると、車イスの人やサリドマイド薬禍の人などよく見かけます。ハンディキャップを背負った人々も、普通の顔をして、普通の生活をしています。必要に応じ、周囲の人々がごく自然に援助してくれます。さらに、帰国して驚いたことは、電柱、電線や看板がやたらと目についたことです。ビルやアパートも周囲との調和を考慮されていないことです。このように、弱者への配慮や都市づくりの点では、日本は未だ後進国と思われるてなりません。

(保健科学部)